

- 民族のこころ (122) -

電子カーヌーンの夢

小田 淳一



カーヌーン工房のシュシャングィ氏と水野信男氏

カーヌーン (qanun) はツィター型の撥弦楽器で、一見小さなグランド・ピアノといった形状をしている。アラブ音楽では最も重要な楽器の一つで、指に爪をはめて弾くことから我が国の箏にも似ており、弦の華やかな響きが特徴的である。

1997年12月24日、国際科研西尾哲夫隊 (民博) の一行はカイロのムハンマド・アリ通りを探索していた。民族音楽学専門の水野信男氏 (兵庫教育大学) がカーヌーン制作現場を是非調査されたいとの意向を受けてである。ウッド (琵琶に似た撥弦楽器) の工場で作っている場所を聞いたところ、「カーヌーンはアレキサンドリアが本場だよ」と言われ、日帰りでアレキサンドリアまで行くことも考えたが日程上無理なので諦める。ところが工場の戸口で太鼓を作っていたおじさんがカイロ在住のカーヌーン作りを一人知っていると言い出し、堀内正樹氏 (広島市立大学) が住所を聞き出した。場所はカイロ北部のショブラ地区で、そこから数キロ、タクシーを飛ばせばすぐ (のはず) である。

ショブラ地区はカイロの中心街とはかなり趣の異なった街で、一方で工業地区の名残を留めながら、高級住宅街としての開発計画がどこでどう狂ったのか、結局は庶民の居住区になったという何とも言い難い雰囲気のある地区である。太鼓作りのおじさんに教えられた「通り」の周辺を探し回ると楽器工場のような建物はどこにも見あたらない。やっぱり地中海の魚を食べに行っただけの方がよかったのかとも思い始めた時に、カーヌーンは木で出来ているんだから材木屋を探してそこで聞いてみようと言いが言出した。何の根拠もない、ほとんどやっつけばちの思いつきだったが、シンクロニティーを呼び込むには充分な程度のやっつけばちだったようで、とある三叉路に乱雑に並べられた木材を見つけた。その店主と思しき男性に尋ねると、目指す工房は何と道を挟んだ向かい側だった。結局のところ、カーヌーン工房の近くに何の関係もない材木屋が偶然あっただけの話である。

工房の主であるシュシャングィ氏は我々の突然の来訪を歓迎してくれた。わざわざ出前で取って頂いたトルコ・コーヒーを啜りながら話を伺った。トルコ人の祖父を持つ彼がカーヌーン作りの道に入ったきっかけは、父親がアレキサンドリアで建築技師を勤める傍ら26弦カーヌーンを考案したことによるものらしい。彼によると、自分が開発した28弦カーヌーンは斯界標準のものであり、現在はコントラ・カーヌーンを秘密裏に制作中とのことであった。なぜコントラ・カーヌーンを?との質問に彼は壮大な夢を語った。「ヴァイオリン族には、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスがあるのだからカーヌーンでも同じだけの種類があって当然だし、それらによるカーヌーン・アンサンブルは素晴らしい音楽となるに違いない」。

別れ際に彼は「日本に是非呼んでくれ。私のカーヌーン制作技術と日本の優れたテクノロジーとを融合させたいのだ」と熱っぽく訴えた。かつて電子楽器としばらく付き合っていた私は少々複雑な気持ちになった。彼が日本にカーヌーンを持ち込んだとしても、日本の優れたテクノロジーとやらはカーヌーンの音をサンプリングして波形アルゴリズムを解析し、サウンド・モジュールの一つに加えるだけで一丁上がり、というようなことになり、彼が持ち帰れるのはメモリー・カード一枚になってしまわないかと。